

かにお眠りください。心から黙禱を捧げたいと思いません。

船舶工兵第三十連隊

福岡県 高瀬 充 夫

私は、大正十二（一九二三）年五月十日、福岡県京都郡伊良原村、農業を営む家の六人兄弟姉（男三人、女三人）の末子として生まれました。昭和十八年徴集兵として兵隊検査を京都郡役場で受け、甲種合格でした。

私の略歴の要は次のとおりです。

昭和十九（一九四四）年五月一日 船舶工兵第六連隊に入営

八月十六日 船舶工兵第三十連隊に転属

十一月一日 一等兵に進級

十二月三十一日 北九州市門司港出発

昭和二十年一月一日 上等兵に進級

輸送船「海宝丸」に乗船

一月九日 台湾高雄港上陸

十二月三十日 内地帰還のため高雄港を出

発

昭和二十一年一月二日 広島県大竹港上陸

三日 広島県上陸地にて除隊

学校を卒業後、昭和十六年自動車運転手として行橋市で貨物自動車会社に勤務しておりました。私の仲間の同年輩者や同級生はほとんど軍隊へ行きましたが、私は、本来なら昭和十八年三月入隊予定であったのが延期され、昭和十九年五月一日、山口県柳井の船舶工兵第六連隊に入営しました。

私の現役の証書には戦車隊と書かれてあったのが、入営してみたら船舶工兵でした。入営が他より遅くなったのは、兵種の変更というためであったのか、と後になって思いました。何しろ、私は海のこと、水のこと全然判りませんから困りました。

最初は手旗信号から教わりましたが、前もって予備知識を持って練習していればよかったです、予期

しない船舶でありましたので、ゼロからの出発でした。朝の点呼後は手旗信号を読まされます。小さい声で助手の上等兵に報告し、合っていれば帰されますが、合わなければ読めるまで残されるのです。内務班に帰らなければ食事をする事が出来ませんし、翌日訓練の準備も出来ません。

朝の訓練で、速い者は朝食が食べられますが、遅い者は速く食べないと、その日の訓練が始まってしまいます。朝食を食べぬと叱られますが食べる時間が無いので、湯をかけて、噛むに噛みませんから腹の中へ流し込むより仕方がありません。私は手旗を全然知りませんから遅い方で、随分苦勞をしました。当時既に私の制裁は禁止のためビンタこそ取られず済みました。

兵隊としての基礎教育が終わって、船舶工兵第三十連隊に転属になり兵庫の姫路へ行きましたが、船は港に繋留してあり、姫路の部隊と合同で訓練をしました。私が運転し敵前上陸の演習です。私は自動車を運転していましたから、エンジンの方は、手旗信号と違つて楽でした。入隊前の職業が自動車運転ですから

お手のものでした。上陸用舟艇の長さは二〇メートルぐらい、兵隊が完全軍装で座つて八十人ぐらい乗れるものでした。

運転、操舵、手旗、一期三カ月で教育を受けて一人前になるのです。仲間には船乗りもおり、エンジンを知っている者もおりましたが、全然船に関係のない人もおりますから、その人達は随分苦勞をしたと思います。私は、お陰で一年半で上等兵に進級できました。

昭和十九年の十二月、寒いのに夏服が支給されたので、これは南方へ行くのかなと覚悟をしていました。播磨で、一万トン級の船「海宝丸」に乗船しました。十二月三十一日、大晦日の夕方出港し、昭和二十年一月一日、正月を船上でして門司港を出帆しました。博多沖で船団を組みましたが、輸送船は四、五隻だったと記憶します。出港はしたものの、行き先は教えられませんでした。

昭和二十年一月九日、台湾の高雄港に上陸しましたが、その前に高雄沖で空襲を受けました。飛行機は戦闘機でしたが、銃撃をした後で小型爆弾を投下され、

船首に当たりました。朝六時頃我々はじめ多くの人は海に飛び込んだのですが、夕方五時頃友軍の海防艇が来たので助けられました。

夜間、敵機がくるのではないかと恐れていたのですが、全員上陸させるよう命令が来て、高雄の小学校へ連れて行かれました。暗闇の中で、はじめて、握り飯一個と、毛布一枚を受け取りました。道は暗いので、前の人の後に着いて行き、その夜は教室内のコンクリートの床の上で不安な一夜を過ごしました。南国台湾とはいえ、一月上旬のことですから、海から救助されたものの、空腹と毛布一枚ですから、寒さのため、よく眠ることも出来ませんでした。

高雄上陸前の空襲で、我が隊員は三分の一ぐらいしか助からず、他は海没や戦死をされてしまったのでした。そのため、戦友の大部分は死んでしまいました。細かいことは判りませんが、犠牲者の多くは、我々輸送される部隊の兵員でした。私は案外元気が良かったので、二十人ぐらいの我が隊員と共に高雄に残されて、戦死者の死体捜索をするため、船に乗って海岸付

近を運航し、死体を集めて地元の部隊に引き渡ししました。

本隊は台湾の安京という所に集結したというので本部へ行き、再び高雄に戻り、上陸用舟艇を受領しまして、四月二十二日の夜、高雄港を出発するのですが、昼間は空襲が激しいので、夜間運航で本隊のいる安京に行き、四月二十三日朝、到着することができました。

その後、船内の整備中、またも敵機の来襲を受けました。私は船内に伏せましたが、背中に爆弾の破片を受けたため入院しました。二カ月ぐらい病院で治療を受けたため傷は治癒したというのですが、外見は治ったけれども、中から膿が出ていました。しかし、六月に本隊に帰り勤務を続けていました。

高雄港の中には多くの船が沈んでいて、大きな船は港外に出られぬくらいでした。また、高雄市内は大空襲があったため、一般の家は火災によって随分焼けてしまった惨状も見ました。

部隊は高雄―安京間を往復し勤務に就いていました

が、日本は無条件降伏、終戦となり、その時、私は本隊の安京におりました。終戦となっても、台湾人とのいざこざはありませんでしたし、台湾人は友好的でした。

昭和二十年十二月三十日、内地帰還のため高雄に集結、我が海軍の海防艦で、昭和二十一年一月二日、長崎県大竹港に上陸し、翌日復員となりました。一月三日、広島上陸復員帰宅しました。

その後、昭和二十年四月二十三日の空襲での戦傷した背中の傷はその後十年くらいは内部から膿が出ていましたが、戦後五十余年経過した現在は何事もなくなりました。